

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K21669

研究課題名（和文）「クイア」な人類学の新たな展望：フランスのホモフォビア現象をめぐる人類学的考察

研究課題名（英文）Anthropologically queer study on homophobia in France

研究代表者

國弘 暁子（Kunihiro, Akiko）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：20434392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、クイア・スタディーズを人類学的に「クイア」に人類学化する道筋を提示することを目標とする。その志の発端とは、クイアの定義がゲイ・レズビアン・スタディーズの継承に留まっているとの批判、クイア・スタディーズを人類学化する必要があるとするBoellstorff(2007)の主張に賛同したことにある。常識にとらわれずに、不断に穿った見方をする姿勢を前傾化させるために、本研究では、フランス同性婚法をテーマに掲げ、同性婚そのものではなく、敢えて同性婚法に反対する側の人たちと向き合うフィールドワークを実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランスの同性婚法（2013）、その前進にあるPACS、連帯市民協約（1999）に関する先行研究を掛け合わせて考察した結果、同性の結びつきを一種のインセストタブーだとする見方が明らかになった。インセストタブーとは同族の結びつきを禁止するルールであり、人類文化に共通するルールである。よって、インセストの部類に含まれる同性婚は人類文化を破壊することにつながるという主張である。その一方で、異性同士の結婚の必然性についても、宗教者と共に福音書を読む作業を通じて考察を行った。そこから見えてきたものは、インセストを定める境界線は曖昧であり、かつ恣意的であること、また、性の結びつきをむしろ否定する点である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine same-sex marriage in France from a different point of view. I researched not just same-sex marriage itself but conducted fieldwork among those who rather disagree with same-sex marriage, particularly those who follow Roman Catholic practices. It is an experiment to 'anthropologize' [Boellstorff 2007] queer studies which just stays with Lesbian and Gay Studies.

研究分野：文化人類学

キーワード：同性婚 異性婚 インセストタブー

1. 研究開始当初の背景

人類学的にクィア・スタディーズを「クィア」化すること、つまりは人類学化することを目指し、本研究の立ち上げはスタートしている。そのような志をもつに至ったきっかけとは、クィアの定義がゲイ・レズビアン・スタディーズの継承に留まっているとの批判、クィア・スタディーズを人類学化(anthropologize)する必要があると主張する Boellstorff(2007)の意見に賛同したこと、そして、それこそが人類学的研究の姿勢、つまり、他なるモノに寄り添いながら他なる思考の側へと研究者自身が覚醒させられる「クィア」な側面があるという Weiss(2016)の主張に共鳴したことにある。

2. 研究の目的

人類学とクィア理論に共通する姿勢とは、常識にとらわれずに、不断に穿った見方を前傾化させることにあるが、そのような研究姿勢を意識的に実践するために、本研究では、フランス同性婚をテーマに掲げ、同性婚を巡るフランス独自の問題を明らかにすることを第一の目的とした。フランス同性婚について論じられた複数の先行研究の考察を行ったが、本研究では、敢えて同性カップルを調査の対象とはせず、同性婚に反対、あるいは賛同しない立場にある人たちと向き合うフィールドワークを実施した。賛同しない立場にある人々とは、ここでは、ローマ・カトリック教会側にある人々のことを指す。

3. 研究の方法

2020年度から21年度まではコロナ禍のために海外調査は控えて、専ら先行研究やメディア情報の収集に努めた。2022年からは海外渡航も可能となり、同年9月から2023年3月までの約6ヶ月間、フランス第二の都市と言われるリヨンにある高等師範学校の訪問研究員としてリヨ市内に滞在し、ローマ・カトリック教会での礼拝や様々な行事に関与する調査を実施した。複数の教会関係者と関わりを持ったが、私自身の関心事にとりわけ親身に付き合ってくれたのは、修道会「仔羊共同体」リヨン支部の8人のシスターたちであった。リヨン支部で行われた福音書の勉強会には毎週木曜日欠かさず参加し、週末に行われる聖体拝領の儀式と会食、徹夜祭などの行事にも継続参加し、シスターと出来事を共有し、対話の時間を可能な限り持つように心掛けた。

4. 研究成果

フランスの同性婚法、「同性当事者カップルに婚姻を開放する法律」(*La loi ouvrant le mariage aux couples de personnes de même sexe*) (長谷川 2015:64)、通称「みんなのための結婚」(*Le Mariage Pour Tous*)は2013年に成立し、その法整備の段階から、フランス全土で反対運動が起きていた。不思議なことに、反対運動を擁護するキーワードとして、たびたび「人類学」の文字が使われていた。例えば、反対派団体の一つ、「フランスの春」(*Le Printemps français*)のリーダーである Béatrice Bourges は、同性婚法は「人類学的断絶」を引き起こすと、ラジオインタビューで主張しており[Robeis 2015:894]、他の反対派の政治家や宗教者によっても同様の発言は繰り返し行われ、人々の恐怖を煽ったと言われる[テリー2019:12]。

「人類学的断絶」について、Robeis (2015)の論文、そしてテリー (2019)の研究書では、決まりきったフレーズとして紹介されるに留まり、具体的に何を意味しているのかまでは示されていなかった。「人類学的」の意味を掴むために、文献を探し続けたところ、PACSが議論されていた時代に発表された Judith Butler(2000)、そして Thomas Strong (2002) 二つの論文に辿り着いた。PACSとは、同性婚法よりも前の1999年に成立した法律、「PACS (連帯民事契約) と同

性に関する11月15日法律」のことである。

PACSに関するJ. バトラーの論文は、当時フランスで警戒されていたフランスのアメリカ化をめぐる議論、そこでJ. バトラー本人が攻撃的にされていたことへの応答として書かれたものである。バトラーによれば、フランスで警戒されているもの、それは、同性婚が文化を崩壊することだが、その文化が意味するものとは人類文化の要であるとレヴィ=ストロースが主張したものの、つまり、インセスト・タブーのことだという[Butler2000:408]。Strongによれば、バトラーによるレヴィ=ストロース理解には誤解があるものの、当時のフランスで起きていた同性婚論争の根底には確かにインセストタブーに対する脅威があったと指摘する。言い換えると、インセストとは同じもの同士、同胞、同族のことであり、同性婚もこの延長線上に位置付けられ、危険視されていたのだと。実際に、レヴィ=ストロースの弟子の一人であるFrançoise Héritierは、ホモセクシュアルな統合は一種のインセストであると考えており、PACS 法案に対しても反対していたという[Strong2002:408-411]。つまり、上述した人類学的断絶とは、文化の断絶のことであり、ホモセクシュアルな統合が人類文化のインセストタブーを破ることにつながるという危機感を表していたことになる。

同性婚法がフランスで成立してから早10年が経過しようとしているが、通称「みんなのための結婚」(*Le Mariage Pour Tous*)に対抗して登場した「みんなのためのデモ」(*La Manif Pour Tous*)の反対運動は終息に向かうと、フランスの地元紙Le Mondeの記事(2023年4月17日付)は伝える。しかし、運動自体が終息したとしても、同性婚に対する反対派層が減少したとは捉えるべきではない。なぜなら、フランスのローマ・カトリック教会では、いまだに同性間の婚姻に対して祝福を行っていないからだ。同性婚法とは、教会で祝福する宗教婚とは別物、つまり、フランス革命以降に教会から切り離されて成立した民事婚の問題だと、教会側の人々は割り切って考えることが可能なのだ。

同性婚法に対する反発は示していないが、同性カップルの結婚を教会で祝福することに賛同しない人々は、どのような考えを持っているのだろうか。その点を明らかにするために、リヨン市内にあるローマ・カトリック教会を訪問し、教会関係者と関わり合いを持つようにした。そこから得られた人々のネットワークを伝って、修道会「仔羊共同体」リヨン支部のシスターたちと出会うことができた。以下では、シスターとの共同作業の事例を部分的に描写する。

①ファーストコンタクト：2022年9月29日(木)午後5時、事前に面談の予約をとって修道院を訪れると、英語を流暢に話す二人のシスターが応対してくれた。私自身の研究テーマがインドの現世放棄者やヒンドゥー教に関する研究であったこと、そして、今はキリスト教に対して関心を抱いていることを伝えた。すると、シスターの一人は、「私たちにとって神とは実在する人物であり仏教とは違う」と述べて、自分の手首を掴んでみせた。その言動から、身体をもつイエスキリストのことを意味しているのだと理解した。さらにシスターは、神の言である福音を繰り返し唱えること、それが己の心に届くのだと語ってくれた。この日を契機に、私自身の関心事が、シスターとイエス・キリストとの関係へと移行し、シスターの日々の実践に参加することになる。

②聖体拝領：リヨン支部では、毎週土曜日のお昼時にミサ(感謝の祭儀)が行われる。リヨン支部には専属の司祭は存在しないため、聖体拝領の儀式を執り行うために、その都度外から司祭が招かれていた。支部チャペル内でミサが執り行われない曜日は、シスターたちは別の教会に出かけて、ほぼ毎日のようにミサに参加して聖体、つまり、イエス・キリストのボディを拝領する。聖体拝領について、一人のシスターは、パンがイエス・キリストのボディに変容する、つまり「実体変化」(transubstantiation)するのだと説明してくれた。その儀礼について、「外部の人たちは変に思うかもしれないが、信じる必要がある」、とも説明してくれた。

動詞「信じる」について、フランスの人類学者 Jean Pouillon が論じた、興味深い論文がある。Pouillonによれば、フランス語の動詞、信じる(*croire* [“to believe”])には、信じると同時に、違ふかもしれないという疑いが潜んでいるという。しかし、神の存在を信じるという主張には疑いはなく、神の存在は感受されている(*perceived*)のだともいう。ただし、いかにして神の存在をどのように証明するのかという問いが突きつけられると、信仰における両義性が再び浮上するという(Pouillon2016:485-6)。このPouillonの議論を踏まえて、先のシスターによる発言内容を解釈するとするならば、「信じる」の主体はあくまでも外部の人たちであり、シスター自身は含んでいない、ということである。この点については、シスターとの対話を継続して、さらに考察する必要があると考えている。

③福音書の学び: 毎週木曜日の福音の勉強会では、日曜日のミサで神父が読み上げる福音書の一節を皆で音読・暗唱する。まず、四、五人のグループを作り、それぞれ個室に移動する。各グループではメンバーが輪をなして、福音の言を隣の人から聞き取り、それを声に出して、次の人に伝える。最後まで音読・暗唱を終えたら、今度は、メンバー揃って上から全ての文章を読み上げる。グループごとの音読・暗唱が終わると、参加者全員チャペルに集合して、沈黙の中で一人ひとりが神の言に浸る。そして最後に、福音の一節からどんなことを考えたか、どんなことを感じたのか、自由に語り合う。語り合いの時間は、福音書の解釈をめぐって意見交換をすることができる貴重な機会であり、解釈のあり方から修道女たちの世界観を垣間見することもできる。例えば、2022年11月3日木曜日は、ルカによる福音書20「復活についての問答」を取り上げた。

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのに相応しいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともしない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。

(『聖書 新共同訳一旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1988年)

一人のシスターは、「この節からわかるのは、子供を持たずとも、私たちは永遠を手に入れることはできる。それが『復活』である」と、述べた。福音書における「復活」の意味をよく理解していない私は質問をしてみた。「復活とは、イエス・キリストの復活のことだと思いますが、私たちにも復活はあり得るのでしょうか」と。するとシスターは、「今のはいい質問ね」と言い、次のように答えてくれた。「私たちの中にはすでに復活の萌芽が与えられている。だから、私たちはそれ(復活)を目指しているのだ」と。

福音書は親族に関するテーマを多く含んでいるが、この事例のように、必ずしも男女が結婚をして子供を産み育てなければならないというメッセージを発しているわけではない。イエス・キリストと共に在るシスターたちは、福音書で描かれる親族に関する事例をどのように解釈しているのか、分析をさらに進めていく。

[引用文献]

Boellstorff, Tom, 2007, *Queer Studies in the House of Anthropology*, *Annual Review of Anthropology*, 36:17-35.

Camille Robeis, 2015, Catholics, the “Theory of Gender,” and the Turn to the Human in France: A New Dreyfus Affair? *The Journal of Modern History*, Vol. 87, No. 4, pp. 892-923.

- Jean Pouillon, 2016, Remarks on the verb “to believe,” Translated from the French by John Leavitt, *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 6(3): 485-492.
- Judith Butler, 2002, Is Kinship Always Already Heterosexual?, *Differences: A Journal of Feminist Cultural Studies*, 13. 1
- Thomas Strong, 2002, kinship Between Judith Butler and Anthropology? A Review Essay, *ETHNOS*, Vol. 67:3, pp. 401-418.
- Weiss, Margot, 2016, Always After: Desiring Queerness, Desiring Anthropology, *Cultural Anthropology*, 31/4, pp. 627-638.
- 長谷川秀樹 2015「同性愛者は『性的マイノリティ』か？パックスから同性婚に至るまでのフランス社会における同性愛と同性親権をめぐる議論」横浜国立大学教育人間科学部紀要 III (社会科学) No. 17

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kunihiro Akiko	4. 巻 28
2. 論文標題 Against Taxonomy and Subalternity: Reconsidering the Thirdness and Otherness of Hijras of Gujarat.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 South Asia Multidisciplinary Academic Journal	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/samaj.7819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 國弘暁子	4. 巻 66
2. 論文標題 「クイア」に人類学化するために：「第三」からゼロへの試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 735-749
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 國弘暁子
2. 発表標題 同性婚と異性婚ーキリスト教の側から考える
3. 学会等名 日本文化人類学会第58回研究大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------